

日立製作所創業ゆかりの地にかかる、
日本三大奇橋の一つ

写真◎新井卓

その夜、小平浪平は山梨県大月に近い、甲州街道沿いの猿橋のもとにある宿屋「大黒屋」の2階にいた。杯を傾ける相手は、通信省電気試験所技師の洪沢元治氏(のちの名古屋大学総長。日本の水力発電開発に貢献した。東京帝国大学工学科の同窓だった一人は、その日、偶然にも甲府行き汽車の中でばったり再会したのだ。1906(明治39)年の夏の日のことである。

当時、猿橋よりやや上流の駒橋に建設中だった東京電燈株式会社(駒橋発電所)で送電主任として長距離送電プロジェクトに取り組んでいた小平には、思うところがあった。日立鉱山の経営者であった久原房之助氏(日立製作所創業の基盤となる久原鉱業所の総帥)から、鉱山の電力や電気機械をつくってほしいとの依頼を受け、現在の職を辞して臨みたいと考えていたのである。その夜、小平は、旧知の友である洪沢に、その胸の内を明かす。これに対して、洪沢は、「発電は国策として推進すべき事業であり、電気技師なら誰もがうらやむ職なのに、なぜそれをわざわざ辞してまで仕事を移るのか」と、激しく反対したのだ。

小平は答えた。「君の言うように水力発電、電気普及を重要な国策とすべきことはもちろん同感である。しかしながら、今、僕の従事している水電工事の仕事では、外国から機械器具を輸入し、各製造会社から技術者を雇い入れている。今後は、これらの機械器具を日本で作るようにしなくてはならぬ」と。

この日の洪沢氏との会談が、小平の国産技術にかける思いをよりいっそう強固なものにしたのだ。

猿橋

ろう。同年の秋、小平は久原鉱業所日立鉱山に転じ、その4年後、日立製作所を創業したのであった。

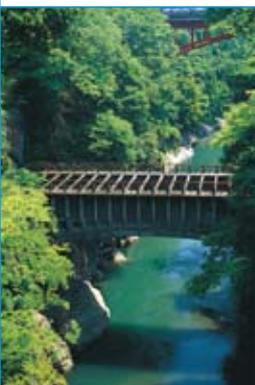
現在の猿橋は、ひっそりとした小さな観光地だ。時折、観光客や地元の人がやってきては、橋の上から川面を眺めたり、写真を撮ったり、写生をしたりしているけれど、かつてそこが甲州街道の要衝だったという面影はあまりない。

「いや、昔はずこかったもんです。軍隊さんが行進しながらこの橋を渡っていきましたし、大勢の人が行き交って、それは賑やかでしたよ」と、偶然橋の上で出会った地元のご老人が教えてくれた。上流と下流にかかる新猿橋、新々猿橋ができるまでは、まさにこの木橋が桂川を渡る要所だったのである。

その構造が面白い。橋脚がなく、両岸から差し出された幾本もの枯木はねによって支えられているのだ。明治時代以前は全国にみられた構造で、川底が深く、両岸が崖になっている場所で、川幅が狭い場所には最適な工法という。古い資料によれば、室町時代の1486(文明18)年にはすでにこの橋があったことが知られている。

大黒屋の2階からは、ちょうどこの橋を眺めることができる。小平が国産機械への思いを熱く語ったその傍らに、日本古来の技による美しくも機能的な橋があった。その偶然は、洪沢氏との再会と同様に、あながち偶然と言いきれない縁でつながっている気がした。

猿橋のもとにある蕎麦屋「大黒屋」



猿橋から、八ツ沢発電所一号水路橋を望む。駒橋発電所で利用した水を下流の発電所で有効活用するための水路(国登録有形文化財)。

1909(明治42)年から東京への送電を開始した駒橋発電所。日本で初めて5万5000ボルトの送電が行われた、当時日本最大の水力発電所。現在も稼働中。





現存の猿橋は1984(昭和59)年に、1851(嘉永4)年の資料をもとに、当時の長さや幅を復元してかけ替えられたもの。姿かたちは当時のままだが、鉄骨のまわりに板を張っている。